

1943

序文

カントは批判哲学以外の体系的形而上学の方法を独断
 論か懐疑論かといふ選言的类型によつて把握し、それを
 彼独自の「史観」にも適用した。① 即ち、独断論といふ名に
 よつては、経験の対象を物自体と見做しつゝ、その認識
 に対し、先天的な源泉を認めむとする一群の体系が意
 味せられ、懐疑論といふ名の下には、同じく経験の対象
 を物自体として前提しながら、それを決して先天的に認識

Kyoto University



するニとは出来ないとす諸体系が意味せられたのであ
 るが②この両者は、^③経験の対象を單なる現象と見做し、
 而もその可能性の制約を先天的と考へる批判論に於て。
 史的にはその發展形態を、論理的にはその綜合段階を
 見出すものと考へられた。要するに批判論的方法は、物
 自体に關する認識一般を否定し、從つてその先天的認
 識はもとより否定する反面、現象の認識に於てはその可
 能性の制約の先天性を認め、限りに於て、一方では経験
 の対象を物自体と見做す所の独断論と懷疑論との共通前
 提を断平として否定して、その新しき立場に於て兩者

の主張を夫々生かしてゆくといふ高次性を有してゐるの
 である。
 斯様な批判論的方法に對する簡明な實例を、^④吾々は、
 純粹理性批判の二律背反論に於ける「理性の宇宙論的自己
 矛盾の批判的解決」と題された一節の中に見出すことが出
 来る。即ち曰く、「世界は量に關して無限なり」「世界は量
 に關して有限なり」といふ二命題を以て相互に矛盾對當
 をなすとせば、世界(現象の全系列)が物自体なることを想
 定することゝなる。和がしかしこの前提
 即ち超越論的仮象を排除して、世界が物自体なることを



否定すれば、二つの主張の矛盾は単なる弁証法的矛盾となつてしまふ。世界は決して(私の表象の背進的系列をばなれ)独立に實在しなから、世界はそれ自身無限なる全体としてそれ自身有限なる全体としても實在しな(Barth)と。此處にいふ「弁証法的矛盾(Dialektischer Widerspruch)」とは、理性の弁証法的表象の上立つ所の矛盾であり、それ故に此の表象の源泉が見出され、その迷妄が摘発されるならば、当然互に宥し合ふべき矛盾なのである。所が先程から考察を進めて来た独断論と懐疑論との矛盾は経験の対象を物自体と見做す

卓に由来し、しかも斯様な表象的前提を否定する批判論に於て止揚せらるると考へらるる限り、この「弁証法的矛盾」と類を同じうするものといへよう。かくてカントの批判論は、独断論と懐疑論との「弁証法的矛盾」の「批判的解決」に他ならなかつたといふ風にも考へることができるであらう。さきに述べた所からも明かな如く、此の「解決」といふ言葉には「史的な意味」と論理的な意味とが同時に秘められ、それは「たのび」であるが、カントはこの二者を貫く原理を未だ充分明かに自覚してゐなかつたことが種々な卓から推



察びます。それは彼の偉大な後人ヘーゲルに残された
 仕事であった。周知の如くヘーゲルは、混沌として霧に
 おぼはれこみたる此の思想を明晰に把握し、之に「弁証法
 (Dialektik)」といふ名を与へたのである。⑤ しかし偉大な
 る先人達の歩いた道を常に歩き直さなければならぬ宿命
 をたつ者々は、此のヘーゲルの在る「弁証法」を充分に体得
 せむとすれば、矢張り先づカント的在る二律背反の戦場
 を経なければならぬやうに思はれる。まことに、かゝ
 る修練に於ける批判論的方法の根柢的自覚こそは、「弁証
 法」の体得を充分な意味に於て可能ならしむるものなり。

はなかうか。
 カントによれば、吾々をして必然的に二律背反に陥ら
 しめる所の宇宙論的理念は、現象より出発する四つの道
 の可想的目標として考へられるのであるが、二律背反に
 於ける定立は、現象の(1)全体と(2)要素、(3)自由なる原因
 性と(4)絶対的存在者を眼差すことによつて、(1)(2)の二方
 向に世界を、(3)に於て自由なる主体を、(4)に於て神を求
 め、宇宙論的、心理学的、神学的といふ三理念への志向
 をえつ。カントはこの定立の世界をポラトニ主義に配し
 つ、それを批判して、「ポラトニは実践的なものに對して



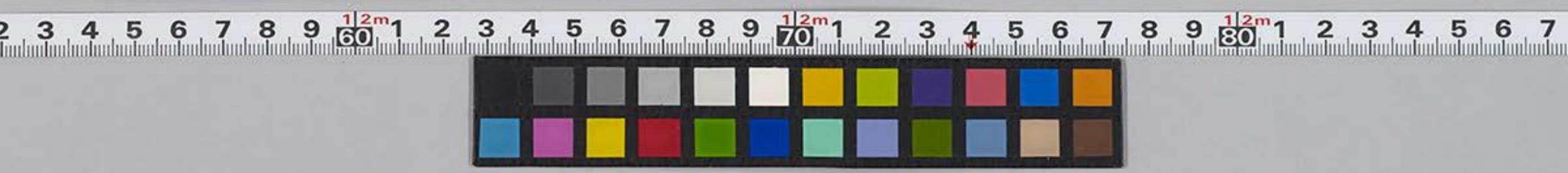
卓越した原理を提示するが、まさにそのために彼は理性を以て思弁的知識にのみ許されてゐる凡てのものに關し、自然現象の觀念論的説明に没頭し、從つて自然的探實を疎かにすることゝを認容する」(B. 500) と述べ、その実践性と反自然的態度とを指摘してゐるが、他方之に對する反定立の世界をばエピクル主義に配して、それを經驗論として特徴づけ、「經驗論は理性の思弁的關心に對して利益を提供するが、」道德宗教からその力と影響とを取り去るやうに見える」(B. 496) と批判してゐる。

自然科学のみならず一般に自然的態度や觀方の圧倒的

(日本國定規格 B 5 第 4)

なる現代に於て、宗教と実践の世界は今や常套に覆はれむとしてゐる。然るに此の宗教と実践とこそは、古代より特に吾が東洋の本質をなす所のものではなかつたか。吾々は東洋の光を輝かせるものとする使命を帯びて今戦ひに從つてゐるが、その光をさへきつる近代ヨーロッパ主義の雲を掃ふことは、武力のみでは到底成し遂げ得るものとは思はれない。吾々が自己の内なるローバ主義、即ちかの反定立の世界を打破するのうちに、武力戦の勝利は何等の意義をも成さないであらう。かく此の大東亞戦争は二律背反の両定立向に於ける矛盾對立

Kyoto University



のシンボルとして考へることも可能であり、東洋的精神に象徴されてゐる所の定立の世界、即ち理念の世界の原
 理を明かにすること、反定立の世界を象徴する所のヨ
 リロツパ的精神に対する対決を意味し、又この意味に於て
 ニ律背反の一つの行とも云ひ得るであらう。
 しからば何故に此の爲にヨーロッパ人であるカントの思
 想を依り所とせねばならなかつたか、といふならば、
 カントはルネッサンスを起奏とする近代ヨーロッパ精神の波
 が一つの頂尖に達したと思はれる啓蒙時代の末端に立つ
 て、一方大陸に於てライプニッツ、ヴォルフ哲学に極まつた合

理論と他オイギリスに於てロック、ヒュームの哲学に極まつ
 た経験論とを身を以て体得しつゝ、終に両者を綜合し、夫
 々の立場を彼の主著たる純粹理性批判に於て論理学と感性
 論との中にとり入れながら、両者が夫々その何れが一
 方に重きを置く所の悟性と感性との結合から成るべきを認
 識は眞の意味に於ては單に理論的なる自然認識を出して
 ことは出来ないとし、兩者及びその單なる綜合の立場に
 限界をなす。その弁証論に於て実践的なる宗教及び道德
 の基礎をなすべき理念の世界を消極的ながら示すことに
 よつて、近代ヨーロッパ精神の限界を明かにすると共に東



洋的精神の曙光を告げたのである。この立場は積極面に

ひるがへされるならば当然実践理性批判に於ける「実践理

性」の優位の思想に迄発展すべき方向をもつてをり。この

真に於てカントの思想は近代ヨーロッパ的思想の限界を

目覚めさせ、東洋的思想の出現すべき舞台を

作り出しつうへてくれた人であるといふことが出来る

と思ふ。ここに現在の吾々が行すべき二律背反を既に純粹

なる理論の姿に於て予見してめた彼の偉大なる思想は

なうない。私が理念の世界に於ける原理の重要な一面

を示すものと思はれる。象徴の問題を特にカントの思想に

(日本国定民権 第 4)

註

即して探案せむとする所以である。

- ① 1) B. 884 2) B. 787

1) Was nun die Beobachter einer wissenschaftlichen Methode betrifft,

so haben sie hier die Wahl, entweder dogmatisch oder skept-

tisch, in allen Fällen aber doch die Verbindlichkeit, systema-

tisch zu verfahren.

iii) Die erste Schritt in Sachen der reinen Vernunft, das das

Kinderalter derselben auszeichnet ist dogmatisch. Der eben-
genannte zweite Schritt ist aber nicht, und geht von Vernünftigkeit
der durch Erfahrung gewinnbaren Urteilskraft.

② 第一批判の方法論の第四章によれば、独断論と懐疑
論とは形而上学の *synthetische Methode* の二類として考
へられ、前者の代表者としてカント、後者の代表者とし
てはヒュームが挙げられる。所びカントは屢々カント
と併称してライプニッツを独断論の有力な代表者に数へて
たり、どちが方法論の同じ章では、彼を「純粹理性認

(日本国定訳書 57頁)

識が「理性にかゝるその源泉も有する」と考へる「知性論者」と
見做し (B. 302) 分析論の附録には、「ライプニッツは現象を
物自体と考へた (B. 220) と云つてゐる。又、ヒュームに因し
ては、才二批判の第一章に於て、「ヒュームが、経験の對象
も物自体と考へる限りに於て、原因の概念を虚
偽にして迷妄なりと説明したるは全く正し。」「
、従つて彼は物自体に因する斯様な先天的認識を決し
て許すことは出来なかつた」 (Akademie-Ausgabe, S. 53) と
述べてゐる。証左は之に止らざらんが、以上を以て代
表せしめようと思ふ。



④ vgl. A. 94

ES sind aber drei ursprüngliche Quellen, (Fähigkeiten oder Vermögen der Seele) die die Bedingungen der Möglichkeit aller Erfahrung enthalten, und selbst aus keinem anderen Vermögen des Gemüths abgeleitet werden können, nämlich, Sinn, Einbildungskraft, und Apperzeption. Darauf gründet sich 1) die Synthesis des Mannigfaltigen a priori durch den Sinn; 2) die Synthesis dieses Mannigfaltigen durch die Einbildungskraft; endlich 3) die Einheit dieser Synthesis durch ursprüngliche Apperzeption.

⑤ vgl. Cassirer-Ausgabe, Bd. VIII, S. 242

Es sind also drei Stadien, welche die Philosophie zum Betruf der Metaphysik durchzugehen hatte. Das erste war das Stadium des Dogmatism; das zweite das des Skeptism; das dritte das des Kriticism der reinen Vernunft.

Diese Zeitordnung ist in der Natur des menschlichen Erkenntnisvermögens gegründet.

⑤ カントは「二の矛盾に於ける理性の

南のニニニ」の「第一節 (B. 490—504) に於て二律背反の定

立の側に独断論を、及定立の側に経験論を位置づけらるるが、彼は才ニ批判に於て懐疑論を経験論の「避くべからざる帰結」とも云つてゐるし〔...〕

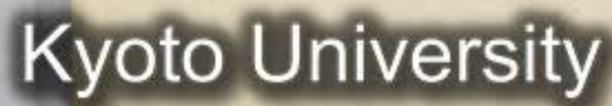
nach Negatiffung des

Empirismus eines Neopurpur, die unvermeidliche Folge derselben, nämlich den Skeptizismus, v. s. w. (Akademie-Ausgabe, s. 53)

の所でも両者の密接な関係に於て叙べてゐるから、此の位置づけは独断論と懐疑論との間に転用されても差向はないであらう。カントの批判哲学は、純粹に理論的なる立場から二律背反の解決を目ざすと共に、それと相即不離な関係において独断論と懐疑論との対立の止場と

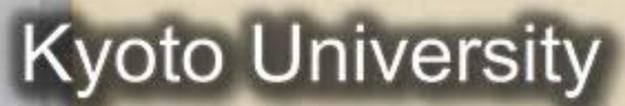
(日本国定規格、B5判)

の歴史的課題にも答へんとしてみたいのである。その向の事情は、一八〇四年にリンネの手によつて出版せられた形而上学の進歩に關する論文に明かである。そのことは当面の問題としては大陸合理論と英国経験論との葛藤を解き、一般には合理論と経験論、觀念論と實在論、精神の立場と自然の立場との矛盾を解決せむとする試みであつたのである。もしカント哲学の歴史的意義と永遠なる生命とが以上の真に存在するところとすれば、この試みも更に克實し一般と之に全致するしめたる蓋出藍の後継者としてヘーゲルを考へることは一應は許され得るのであらう。



思惟するのめど如何なる直観も相慮し得ない様を成る概
 他の一は Symbolisch な仕方。此の場合には理性が
 或る概念にそれと一致する直観が先天的に与へられ
 は Schematisch な仕方。此の場合には悟性が把握せる
 tio sub ad spectum) には二た通りの方が有る。一つ
 感性化としこの全この Hypotypose (Darstellung, Subjec-
 与へられ得ないからである。
 表示せよといふならば、それは無理な要求である。理念
 方理念の客観的実在性も、しかも理論的認識に対し、
 表示せよといふならば、それは無理な要求である。理念
 に対し、それは全く如何なる直観もそれと相慮する様には
 与へられ得ないからである。
 感性化としこの全この Hypotypose (Darstellung, Subjec-
 tio sub ad spectum) には二た通りの方が有る。一つ

には Schemate と名付けられる。若し其上、理性概念即
 的概念の場合には Beispielen と呼ばれ、純粹悟性概念の場合
 常に直観が必要とされる。而して此の様な直観は、経験
 (一) 吾々の概念の実在性を表示する (Darstellung) ためには
 所を掲げ、そこが象徴のメルクマールを抽出すること
 によつて、吾々の課題を明確に把握することを目指すこと
 と思ふ。
 * * *
 少し繁雜の嫌は有るが以下に此の三者の要



念に對して、何等かの直観が裏打ち (unterlegen) せらる。先天的概念を裏打ちする全この直観はかくて Schemate か Symbole であり。前者は概念の直接の表現 (Darstellung) 也。後者は間接の表現を内容としてある。このことを前者は Demonstrativ に、後者は或る Analogie (それには經驗的直観を用ひし) を媒介として行ふ。

以上要約せば、① 象徴は、理性の概念の感性化の方式として、先天的概念の實在性を表示するに必要なる直観の一つ (理論的認識に對してはなく、恐らくは實踐的認識

日本書紀 卷第 4

識のみに對しては、このことは可能なのである。② しかし理性の概念即ち理念には如何なる直観も (直接には相慮し得ないから、その直観は Analogie によつて間接に理念を表現すは感性化するの事である)。

(二) 「悟性の純粹概念も可能的經驗の対象に對して思惟し得るものとして表象するといふことは、即ちそれらに客觀的實在性を与へるといふこととあり。總じてそれを表現する (Darstellung) といふこととあり。これを遂げ得ない場合には概念は空虚であり、即ち何等の認識たり得ない。かゝる働きは、客觀的實在性が概念に對し、これを一

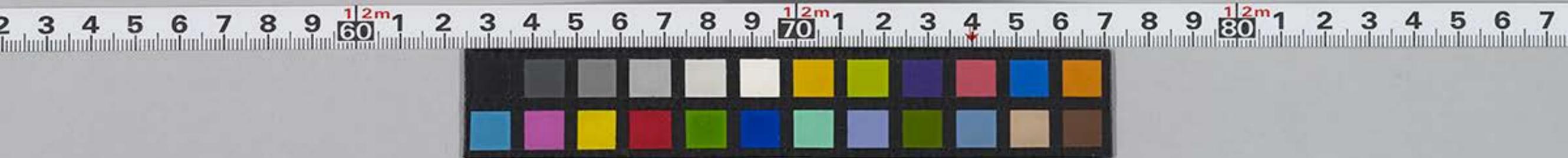
Kyoto University



致する直観によつて端的に（直接に Directe）与へられる
 場合、即ちこの概念が直接に表現される場合には Schema-
 tism と稱せられ、概念が直接に与へられなくとも帰結の
 方に（間接に indirecte）表現されるのみならば概念の Sym-
 bolisierung と名付けられ得る。前者は感性的なるもの
 の諸概念（Begriffe des Sinnlichen）の場合に行はれるの
 であり、後者は超感性的なるもの、諸概念（Begriffe
 des Übersinnlichen）に對する一つの教の手段である。
 れ故、超感性的なるもの、諸概念は嚴密には表現され得
 ないのであり、又如何なる可能的經驗のうちにも与へら

(日本国文現存 57 頁 4)

れることの出来ぬものではあるが、しかもたとへ实践的
 なる認識としてのみ可能であるにすぎないにせよ、必然
 的に一つの認識に属するものである。
 理念（又は理性概念）の象徴は Analogie による対象の表象
 である。』 (Carmin-Ausgabe, Bd. VIII, S. 260)
 之によれば、① 象徴は、超感性的なるもの、諸概念
 （理念又は理性概念）を間接に表現する働き、即ち純粹理性
 概念に（間接ながら）客観的實在性を与へる働きであり、
 し、此の働きは（理論的なる意味に於ては認識とは云ひ得
 ないにしろ）少くとも実践的なる意味に於ては一つの認



識と考へることが出来る。② 又、「象徴は詳しくは「理念

の象徴であり、それは Analogie による対象の表象である。

(三) 「認識は経験に対し Schematism をもつ。それは

der reale Schematism (transzendental) 及び der Schematism nach der Analogie (symbolisch) がある。

的実在性は理論的であるが、理念の実在性は単に実践的

である。自然と自由」(Casimir-Ausgabe, Bd. VIII, S. 321)

以上によれば、① 象徴とは Schematism の一つの仕方

詳しくは Analogie による Schematism の仕方である。②

又、(一) と (二) より得た「象徴」のメルクマールを思ひ浮かべ

(日本国文館 5頁4)

右の対照的敘述をうかば、象徴は「理念の実在性」に關係し、そのことの故に「実践的」であり、更には「自由の概念に關りをもつものと考へられべきことが解る。

* * *

はじめに述べた如く、カントが象徴の問題を原理的に

述べてゐるのは、僅に批判書ではオミ批判、批判書以外

ではドイツ哲学の進歩に關するかの懸賞論文の草稿のみ

であるが、後者はオミ批判の出版後三年程のうちに執筆



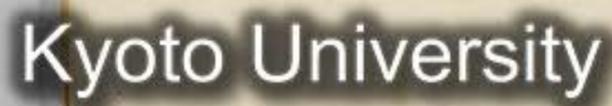
されたものらしく、しかもその内容が彼の批判哲学の史的位置づけの試みともいって懐古的な性質のものであるためか、全体の思想の上にも従って又「象徴」の概念に關しても前者との間に殆んど不整合を示してゐない。それ故、以上に拙を出したメルクマールを互に参照して、整理するだけで、充分にカントに於ける象徴概念の全像を浮かび上がらせることが出来ると思ふ。

斯様な手續によるならば、吾々は概ね次の様な帰結に到達することが出来る。即ち、

(イ) 象徴は一種の直観として先天的概念の一つたる理念(理性概念)の客観的實在性を

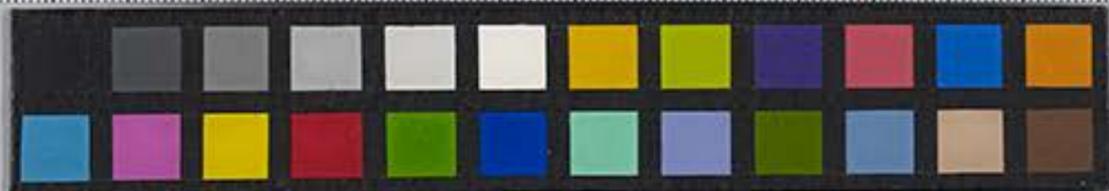
の表現(感性化)に關係し、その限りに於て(広義の) Schema-ticism の一方式である。③ 而してその表現は、直接的に即ち Analogie によつて行はれ、この働きは一つの實踐的認識と考へられ得る。④ 従つて、象徴は實踐的意義を有する所の Analogie を原理とし、この Analogie によつて(直接的に)理念に客観的實在性を与へるものである。と。

かくてカントに於ける象徴の問題は、如何にして純粹理性概念に客観的實在性を与へ得るかといふ理念の客観的實在性の問題に還元されるのであらう。これを引用



先天的綜合判断は可能なりやといふことは、先天的概念
 出た。④ 所で、批判哲学の最高課題、即ち如何にして
 超越論的演繹 (Transzendental Deduktion) と名付けら
 先天的概念が対象に關係しうるか、といふ風な説明は、
 念が対象に關係しうるかといふことであり。③ 如何にして
 性を与へうるかといふことは、即ち如何にして先天的概
 カントによれば、如何にして先天的概念に客觀的實在
 二

文の属しとある一節が象徴の向題を主題的に取扱つて
 ながら、純粹悟性概念と純粹理性概念とに客觀的實在性
 を与へる仕方についてと題され、二には
 つまりとして来ると思ふ。しかし純粹理性概念に、否一
 般に先天的純粹概念に客觀的實在性を与へるとは如何な
 ることを意味するのびありうか。



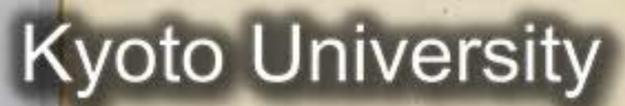
限定ではありながら、少くとも或程度の客観的妥当性を
 に於ける様な演繹はゆるぎないにせよ、それ自身未
 を用意してゐる。曰く、「純粹理性の理念は、たとへ範疇
 カントは此の疑問に對して、次の様にはつきりとした答
 疑問すら予想せねばならぬ。いかに思ふ。しかし
 は、「理念の演繹は果して行はれたらうか」といふ
 左程に明かになつてゐるとは思はれない。むしろ吾々
 が何處ぞ且如何にして説かれてゐるかといふことは必し
 ば理念の超越論的演繹及び理念の Schematismus の理論
 あるが、理念と対象との關係の仕方の説明、云ひ換へれ

が自らを越えて対象と關係する所に先天的綜合判断が成
 立するものと考へられ、^⑤ 純粹悟性概念範疇、
 純粹理性概念(理念)といふ二つの先天的概念の対象との關
 係の仕方、云ひ換へればそれは客観的實在性を與へる仕
 方を明かにすること、即ち之等の先天的概念の超越論
 的演繹を要求する。而して少くとも純粹悟性概念(範疇)に
 關し、これは「純粹悟性概念の超越論的演繹」といふ一章があ
 る。この要求に答へてゐること、又「純粹悟性の Schematismus」
 といふ一章で、^⑥ 範疇と対象(適切には現象)と
 の關係の仕方が説明されてゐること、これは周知の事實なり。



有つてゐて全く空虚なる思惟の所産を表すべきではない
 とするならば、其の演繹は断じて可能でないならばぬ。
 ・ ・ ・ ・ ・ この下は純粹理性の批判的作業を完成せし
 める所以である。吾々は今この下に着手しようと思ふ」
 (D. 677f.) と。即ち、理念の超越論的演繹は明かに行はれ
 てゐるのがある。しかしそれは、研究者の視野からは外
 れ勝を、「超越論的弁證論」に対する附録 (Anhang zur Trans-
 zendentalen Dialektik) といふ如き辺鄙な場所に於てある
 ために、吾々は比の演繹をカントの言葉に即して見て行
 く必要を殊更に覚える。

「或るものが私の理性に対して ein Gegenstand schlechthin
 として与へられるか、 ein Gegenstand in der Idee として与
 へられるか、といふことは大きな相違がある。私の概念
 は、前の場合には対象の限定を眼ざすのであるが、後の
 場合には實際にはたゞ Schema であるにすぎない。この
 Schema に対しては直接にはもとより反象的にせよ如何なる
 対象も与へられず、それはたゞ理念に於ける諸対象を



この理念^⑧に対する関係と媒介として、その体系的統一に因して即ち直接に表象するに役立つのみである。そこで私は云ふ、最高睿智者の概念 (der Begriff einer höchsten Intelligenz) は単なる理念である。即ち、この概念の客観的実在性は、それが直接に対象に因係するといふことには於てはなくして (蓋し吾々はさういふ意味に於てはこの概念の客観的妥当性を弁明することはできなからう) 約に従つて秩序づけられた。Schema^⑨があるにすぎないといふことは、この Schema はかゝる

⑧ 片平國太郎博士

理念の想像の対象をその理由又は原因でもあるかゝる様に見做して其處から経験の対象を導出することによつて、吾々の理性の経験的使用に於ける最大の体系的統一を得るためにのみ役立つ。かくしたとへば、世界の諸物はその現存在を最高睿智者に根ざして有つたかゝる如くに (als ob) 見做されねばならぬ。斯様に理念は本来 ein heuristischer Begriff なのであつて ein ostensiver Begriff ではない。即ち理念は、対象が如何なる性質を有するかといふことにはなくして、吾々がその手引のもとに経験一般の諸対象の性質と結合とを如何にして探究すべきか

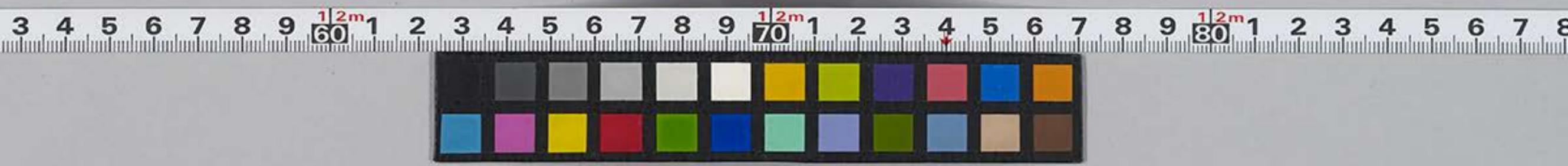


あるかといふことを示す。またたとへ三種の超越論的理
念(心理学的、宇宙論的、神学的)は直接には決してそれらに
対応する対象や対象の限定に關することはないといへ
理性の経験的使用のあらゆる規則は *ein solcher Gegenstand*
im der Idee を前提としてのみ体系的統一を獲得し、それ
と常に経験的認識を拡張しはするが決してそれらに背くこ
とはどきないといふことが示すを得るならば、この様な
理念に則つて處理することば理性の必然的な *Maxime* であ
る。以上が思弁的理性の全理念の超越論的演繹であり、
二二では理念は、経験が与へ得る以上の対象にいつてなる。

(日本思想史 534)

この認識を拡張する所の *Konstitutive Prinzipien* としてこ
はなく、経験的認識一般の多様な体系的統一の *regulative*
Prinzipien として述べらるゝ。この様な原理に従ふ
ならば、経験的認識は、斯様な理念なしにたゞ悟性原則
のみを使用しなすを得るよりも、自らの限界内では、
一層よく用托され且整理されるのである。(B. 697-699)
上の文章に於て、
Schema — *Gegenstand in der Idee* —
als ob — *heuristischer Begriff* — *Maxime* — *regulatives*
Prinzip といふ一つの魚のつながりをもつ諸概念に吾々
は特に注意を向けねばならぬ。「理念の超越論的演繹」の

Kyoto University



の骨格はまさしく之等の概念によつて形成されてあるの
である。

上文によれば、この場合の Schema は Gegenstand

schlechthin のではなくて Gegenstand in der Idee の相関者

として、対象を（直接にはなく）たゞ間接にのみ表象する

に役立つものである。かゝる Schema の例として「最高叡

智者の概念」が挙げらる。最高叡智者自身は「理念の想像

的対象」として所謂 Gegenstand in der Idee なのに対して、

それの概念は一つの理念であり、更には Schema なのど

ある。而して斯様な Schema は、理念の対象、云々換へれ

(以下同様に 07.4)

ば Gegenstand in der Idee としての最高叡智者を、他の諸対

象の理由若しくは原因と見做して、理性の経験的使用に

於ける対象の体系的統一を得るのに役立つ。斯様に、「最

高叡智者の概念」は世界の諸物の現存在がすべて「最高叡智

者」に根ざしてあるか、如く、(als ob) 考へしめる限りに於

て、吾々がそれのもとに経験一般の諸対象の性質と結合

とも如何にして探究すべきであるか、云々ことを示す所

の heuristisch-er Begriff であり、しかもかゝる Begriff に則

つて處理することは理性の免れ得ない Maxime に他ならぬ。

而して以上の様に考へる時に、理念は regulatives Princi-

N.P. として正当且有効に使用され得るのである。

純粹悟性概念の演繹が範疇の客観的使用を必ず純粹悟

性概念の圖式を媒介とすべし empirischer Gebrauchに限つ

たのに対し、理念の演繹は理念が圖式にすぎないこと

を明かにして理念の理論的使用を regulativer Gebrauch に

限るべきことを教へる。

* * *

今、「認識は経験に対し Schematismus をもつ。それは

der reale Schematism (transzendentale) der Schematism nach

der Analogie (symbolisch) があるので。範疇の客観的実在性は

理論的であるが、理念の実在性は実践的である。自然と

自由」といふ前掲の一文を再讀するならば、ここにいふ

「Analogie による Schematism」と上に述べた「理念の Schemat

の向に一つの密接な関係も想定せざるを得ない。吾々は、

「Analogie による Schematismus」に於て (三) (一) に於ける引用

文の番号) に明かにし得たのと同様に、理念の超越論的演

繹の根據としてこの「理念の Schema」も、理念の客観的実在性

に依りをもつことを上に於て確めることができたからで

ある。所び、(一) 共に Analogie を「象徴」の基本的メルク
 マールとして挙げたり。右の文、即ち(三)は「Analogie に
 よる Schematismus」に symbolisch と註してある所よりして、
 カントに於て「象徴」は「Analogie による Schematismus」とは
 同一の意味に用ひられ、その故に彼の体系に於ては「理
 念の Schemata」と殆んど同一のポストに置かれ、また
 事。ことが解る。
 しかし吾々は、是を以て直ちにカントが「象徴」と「理念」の
 Schemata」とを同じものに考へてみた結論することはず
 きない。カントに於ては、象徴が一種の直観と考へられ

(日本国定訳 頁4)

てみるのに対して、「理念の Schemata」は上の引用文に「明
 がな如く理性の概念たる理念と同一視せられてみるからで
 ある。即ち前者が直観としてあくまで個別的なりの対
 して後者は概念としての普遍性をまたねばならない。そ
 こに多と一との対立が生じてどうして等並ひとしなみに考へるこ
 とを許すたのびある。しかし吾々は之と相似た下情を
 「純粹理性概念の Schematismus」に於て見出すことができ
 即ちそこでは範疇を現象に適用するため両者の媒介者
 が求められるのであるが、この要求は一と多との二重性
 格をえつ時間によつて満たされることになる。即ち自ら

Kyoto University



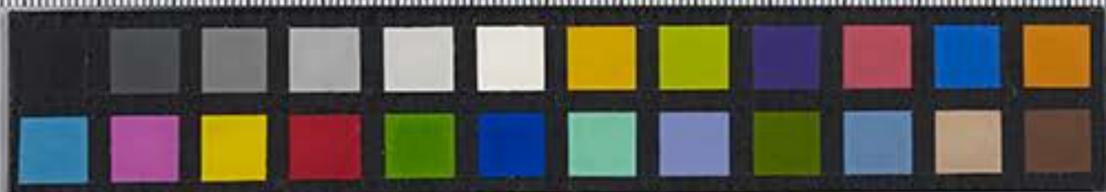
「いったい先験的時間限定 (transzendentale Zeitbestimmung) はそれが普遍的であり且先天的規則に基く限りに於て(時間限定の統一をなすところ) 範疇と同種の「ある。時間にはしかし他面に於てはそれが多様のあらゆる経験的表象に含まれてゐる限りに於て、現象と同種の「ある」(B. 177f.) と。此の際、感性の形式的にして純粹なる制約としての「先験的時間限定」即ちそこに於ける普遍的側が「純粹悟性概念の Schema」とせられてゐるのであるが (B. 179) 時間ばかりの普遍性の他に個別性を、又一つみだはなく同時に多をも含んごみるのであるからこゝ範疇と現象との媒介作用たる

Schematismus を可能にしてゐるのである。それ故、此の場合 Schematismus を單なる Schema とは一應區別して考へるのである。やうに思はれる。Schema があくまで普遍的とか一の性格に傾いてゐる靜的にして把へられたいのに対して、Schematismus は普遍と個別一と多との動的な相互媒介の原理と考へられるからである。かくの如く、範疇を現象に適用してそれに客観的實在性を与へるために先験的時間限定たる Schema と時間多様との媒介原理として「純粹悟性概念の Schematismus」が考へられるのであるが、同様にして、理念に客観的實在性を



態的把握は「史性を離れれば抽象的とならざるを得ない
 であらう。しかし此の問題に「史性を導入せんとするな
 らば、吾々には最早カントの立場に止ることは許されな
 かくて吾々が如上の二概念の關係を問題とし、之をい
 らかすも明かにしようとするならば、之に跡付けを
 たカントの概念規定に新しい生命を与へなければならな
 いのである。これは、果してどの様にしてそれは行はれ得
 るであらうか。

与へるために概念的普遍的なる「理念の Schemata」と直観的個
 別的なる「象徴」とを相互的に媒介する原理が原理が考へら
 れてもよいであろう。この原理にもし強いて名を付ける
 ならば、「純粹理性概念の Schematismus」とも呼ぶこと
 ができよう。
 しかしながら、「理念の Schemata」と「象徴」との間に以上の
 やうな相互媒介的關係を想定するならば、この關係の本
 質上吾々は兩者の動態的なる把握に迄歩を進めなければ
 ならぬ。動態は一般に時間關係をふくみ、時間をもつ
 とは具體的には「史的時向」であると考えられるから、動



叙べてゐる。二二に理念の超
 一歴史性と一歴史性の二重性
 張を配し。(ii)を中世の産物たる
 諸々の神学体系に則つて
 に夫々古代の代表的哲人たる
 プラトンとエピクルスの主
 陥らねばならぬとせらるる二
 律背反の定立と反定立と
 莫となし。(iv)に於てはその
 理念を追求する際に必然的に
 ルトの根本命題に血を引く「我
 思ふ」(Ich denke)をその中心
 問題とするが鬼に角。(i)に於
 ては近世哲学の祖たるデカ
 ールやうにも思はれる。カント
 も意識してかせざしてかは
 (i)は近世。(ii)は古代。(iii)
 は中世の歴史的理念を現して
 る。よく見るに三つの理念は
 夫々、

上に述べたやうに、ホー批判の
 弁證論の附録では「理念」
 の「Schemata」と理念とは同じ
 意味に用いられてゐる。その
 三つが考へられてゐる。(i)は
 心理学的。(ii)は宇宙論的。
 (iii)は神学的。(iv)は世界的。
 (i)は神の理念である。之等の
 理念は、「人間の理性の本性に
 於て基礎を有する」(Dewey)もの
 として、あらゆる時
 代と個人差とを貫いて理性に
 存するもの、やうに考へら

三

Kyoto University

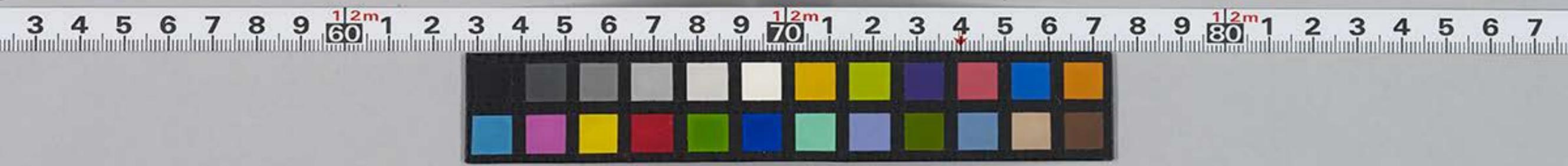


といふことにならば、
 単なる思弁的理性の此のやうな働
 ば、その人は絶え間なき動搖の狀態にあることであらう。
 諸主張の理由の内容に就いてのみ考察しようとする
 べし。或る人があつた關心を絶つて、
 立の立場と經驗論(反定立の立場)との理性の關心に
 のどはなからうか。カントもニ律背反に於ける独断論(定
 じめた性格とか時代精神とかいふものも考へられ来る
 一つに強く傾くことを免れ得ないであらう。そこには又
 ても可能性に止るつてあつて、吾々は現實的にはど
 ころに強く傾くことを免れ得ないであらう。そこには又
 じめた性格とか時代精神とかいふものも考へられ来る
 のどはなからうか。カントもニ律背反に於ける独断論(定
 立の立場と經驗論(反定立の立場)との理性の關心に
 べし。或る人があつた關心を絶つて、
 諸主張の理由の内容に就いてのみ考察しようとする
 ば、その人は絶え間なき動搖の狀態にあることであらう。

(Turn and Handlung)

格が計らざれば露出しすぎるのであつた。カントは一面的
 に超歴史性のみを強調して歴史性は敢て問題にしようと
 はしなかつた。私は此の理念の超歴史性と歴史性の向
 題を、その可能性と現實性との問題に一應還元して考
 察を進めよう行きたいと思ふ。
 カントは、「吾々がこれに『?』概念或は理念を構成し
 うる表象のあらゆる關係は三種ある。(一)主観に對する
 關係、(二)現象における客観の多樣に關する關係、(三)あらゆる
 物一般に對する關係が即ちこれである。」(B. 391)と、
 構成の三つの可能性について敘べてゐるが、之はあくま
 まで可能性に止るつてあつて、吾々は現實的にはど
 ころに強く傾くことを免れ得ないであらう。そこには又
 じめた性格とか時代精神とかいふものも考へられ来る
 のどはなからうか。カントもニ律背反に於ける独断論(定
 立の立場と經驗論(反定立の立場)との理性の關心に
 べし。或る人があつた關心を絶つて、
 諸主張の理由の内容に就いてのみ考察しようとする
 ば、その人は絶え間なき動搖の狀態にあることであらう。

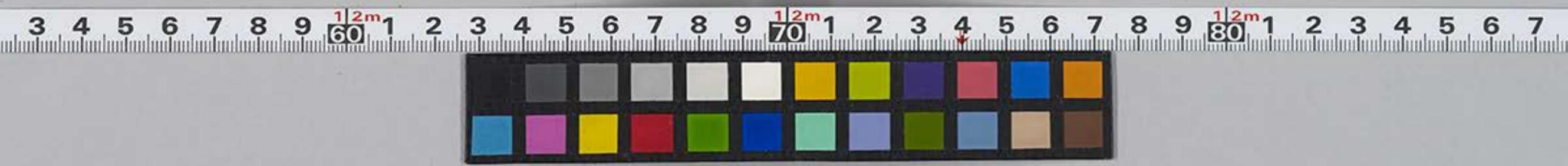
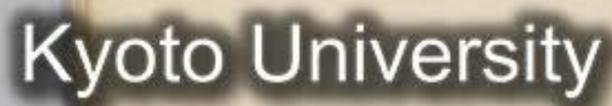
(日本國定規格 B 列 4)



するもの、云々換へれば「史に内在する理念」なければ
 了所の Schema としこの理念は、現実的「史的」性格を有
 更には「史性を要求する筈」である。かく「象徴」の關係す
 へられるから、上に見て来たやうな意味に於て現実性も、
 さて「象徴」は既に叙べた如く「勝つて実践的なるもの」と考
 世の理念に傾いてゐたことは明かである。②
 とは「同一」の位置にをかれらゐる。③
 由の主体たる人格性 (Personalität) 及び人間性 (Menschheit)
 在して三理念中の主位を占へてゐる。④
 esse (essendi) と考へ、更には全体系の要石 (Schlüsselstein) として
 ⑤

又は夢幻の如くに消え失せて、彼はその原理を実践的
 心に従つて選擇するであらう (B. 503) と云つてゐるやう
 に、思弁が可能性の力を向題にして種々の立場に身を置
 ま得るのに対して、実践は現実性の力を向題とし、それ
 政に実現すべきたゞ一つの道を選ばなければならぬ
 である。理念はその可能性に於ては或は三つかも知れな
 すが、現実には古代が世界の理念を、中世が神の理念を、
 近世が人間の理念を選んだやうに、どれか一つを選ばな
 ければならぬ。実はカントも実践理性批判に於ては自
 由の理念を此の批判の頂点たる道徳律の存在根據 (Ratio)

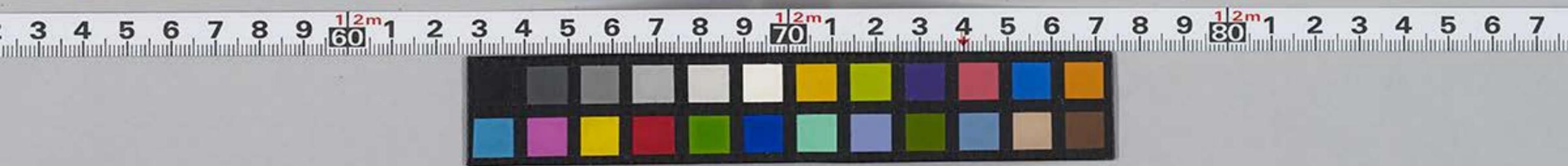
(日本国定規格 B 列 4)



なうなう。さすれば理念の「歴史性を充分に自覚することの
 なかつたカントに於て、^{「理念の schematic」と象徴との関係が}
 明かにせられ得なかつたのは当然とも考へらる。理念
 は確かに「史」に対する超越性を有つてはあらうが、
 同時に内在性をも有つてゐる。忘れらるゝはなうなう。理
 念の起「史」性への探察が思弁的にして静的なる可能性の哲
 学を構成するのに対して、理念の「史」性の探察は実践的
 にして動的なる現実性の哲学を構成するであらう。カ
 ト以後のヨーロッパ哲学の主流は概ね前者より後者への道
 を辿つてゐるやうであるが、しかし此の道はヨーロッパを

い。ニの故に私は、^{「史的」理念の世界に於ける象徴の向}
 題こそ現在のうちに課せられた重要な課題の一つであ
 ると信じてゐる。然し乍ら、カントに於て「可能的」に考へら
 た実践領域として「理念の世界」に於て「史的」性を導入
 してその実践原理を現実的に追求する時、^{「象徴」が如何なる}
 働きを示し且如何なる原理を展開するかと、^{「象徴」が如何なる}
 興味ある論究は、最早その当面の論題の範囲を超え
 るものであり、又現在の私のカの及ぶ所でもない。即ち、
 以上の論考は、真午の大空に染なき星の位置を指しした

Kyoto University



にすぎない。ぬばたまの夜が来た時、火が如何なる光茫
を放つか、といふことは今の私には分らない。

〔後記〕

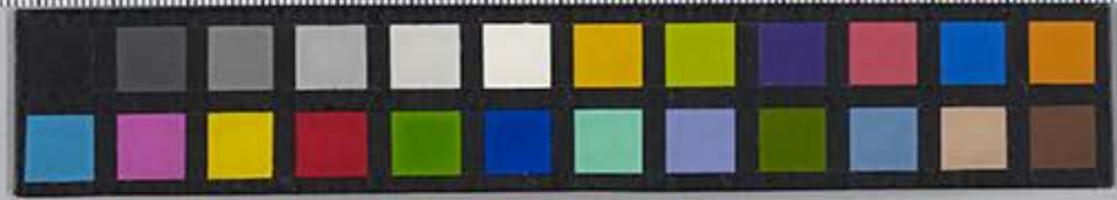
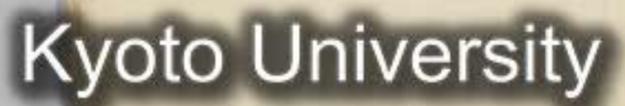
一、私は「純粹理性批判」には先驗哲学のあらゆる構成
要素が属してゐる」(B.28)といふカントの言葉を信
頼して、この論文の課題を徹頭徹尾一批判の立場
に於て取扱つた。寧ろ才三批判等と深い関係をもつ
べき此の問題に對して、かゝる立場を以て臨むとい

(日本國定現物 874)

ふことは甚だ危険な様にも思はれるが、才三批判に
未だ異い私としては此の道の方がずつと安全であつ
たのである。その上、斯様な立場に立つたために、
問題に對する展望はかへつて廣くなり得たのである
いかと思つてゐる。

二、文中處々に「理念の Schema」といふ言葉を用いたが、

之は「Schema」としての「理念」又は「理念」としての「Schema」
の意味で、「の」は同格の「の」として用いた。「純粹理性概
念の Schema」といふ場合と「の」の用ひ方が違ふことを
特にこゝとわつて置く。

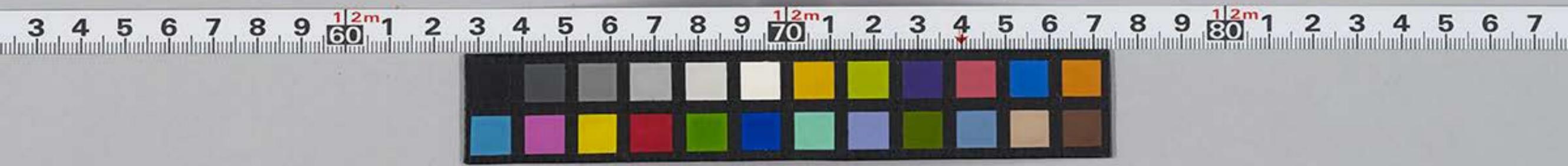


① 問題に曰く
*"Quel sont les progrès néels de la Métaphy-
 sique en Allemagne depuis les temps de Leibniz et de Wolff?"*
 と。
 カントが此の懸賞問題に対し、書いた草稿は三種残
 されたる。之等は、周知の如くリンクの手によつて編
 纂された。一八〇四年に出版された。

② 二の他に、
 (A) 就職論文の一〇節
 (B) プロログ

補註

三、
"transzendental" を「超越論的」と譯することは、
 止に於ける高坂先生の偉見に従った。しかし、
 従来用ひられてゐる「先驗的」の方が意味の通りがよい
 と思はれるやうな所は、「先驗的」と譯した。
 (一八・七・七)



1. 4. 10. の五七節 (c) 宗教論のオニ篇オ一章オニ節の註
 及びオニ篇オニ部の總註 (d) 人同学の三八節 手が此
 の問題にふれぬ。しかし原理的に叙べられぬと
 は云ひ得ないやうに思ふし。又その内容は大体上に掲げ
 た三つの部分の叙述に攝せられぬやうにもある。

③ vgl. B. 194

Wenn eine Erkenntnis objektive Realität haben, d. i. sich auf einen Gegenstand beziehen, u. s. w.

(日本博定規格 B 列 4)

④ vgl. B. 117

Ich nenne daher die Erklärung der Art, wie sich Begriffe
 a priori auf Gegenstände beziehen können, die Transzendente
 Reduktion derselben, u. s. w.

⑤ vgl. i) B. 124. ii) A. 7 f.

1) Aber bei synthetischen Urteilen a priori fehlt dieses Hilfsmittel
 [die Erfahrung] ganz und gar. Wenn ich über den Begriffe A hinaus-
 gehen will, um einen andern B, als damit verbunden zu erkennen,
 was ist das, worauf ich mich stütze, und wodurch die syn-

relative, mitlin Bedeutung zu verschaffen, und die Kategorien sind daher am Ende von keinem anderen, als einem möglichen empirischen Gebrauch, u. d. w.

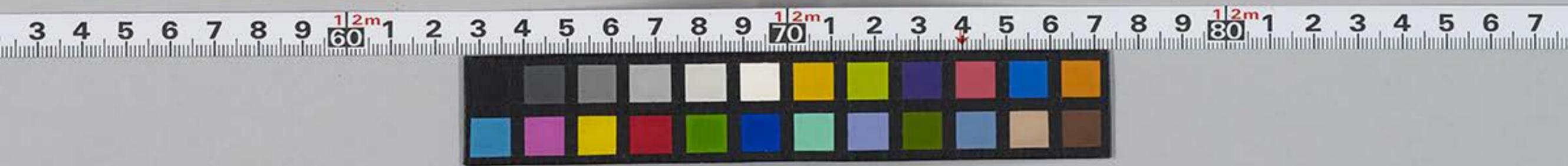
ii) Also sind die Kategorien, ohne Schemata, nur Funktionen des Verstandes zu Begriffen, stellen aber keinen Gegenstand vor. Diese Bedeutung kommt ihnen von der Sinnlichkeit, die dem Verstand realisiert, indem sie ihm zugleich restringiert.

「悟性概念の此の演繹の成果」といふ演繹論の一節の冒頭の言葉、即ち「吾々は範疇によりなくして如何なる対象を denken するにこそがべきか」の概念に對應する所の道

観によりなくしては *gedachter Gegenstand* を決して *er kennen* するにこそはべきな。元来吾々の凡々の直観は感性的である。そして此の認識は対象が直観に於て与へらるべき

経験は、その如何なる先天的認識も吾々には不可能である。その如何なる先天的認識も吾々には不可能である。その如何なる先天的認識も吾々には不可能である。その如何なる先天的認識も吾々には不可能である。

結局可能的な経験的使用以外に使用せらるることには、その故に範疇は

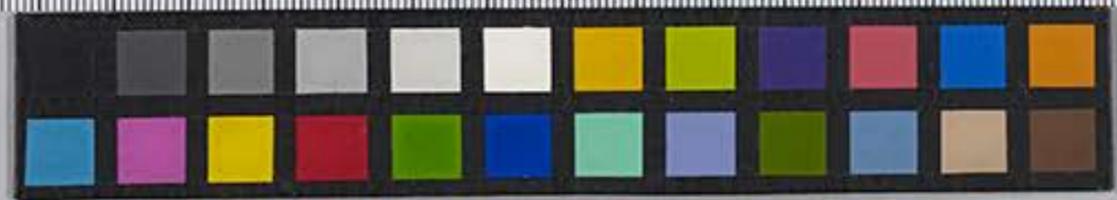
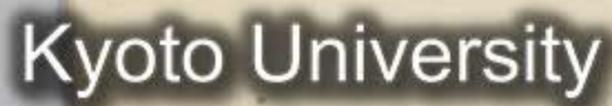


「(B. 185) ... といふ図式論の一文とは、同じ内容をもつたのであり、一般に演繹論と図式論とは概念と直観との媒介的統一といふ共通の課題を有つものと考えらる。しかし図式論が *logisch* なりに訂して、演繹論は *Phänomeno-logisch* であり、前者は後者の成果の上にはじめに展開されねばならなかつた。而して *transcendentale Logik* の精粹は「原則の分析論」即ち原則論にあり、それは図式論によつて明かにされた範疇の *Schematismus* を存理とし、範疇と直観との総合的統一。即ち先天的綜合判断の可能性を証明する事によつて、批判の最高課題に答へる。

(日本国定規格 自判 4)

⑧ 「此の理念」とは "Gegenstand in der Idee" の "Idee" を指す。

⑨ 「そこは私に云ふ、言々の一文が、此の演繹の山である。その要旨は、「理念の客観的実在性は、理念が *Schemata* にすぎない」といふことに於て成立する」と云ふに盡まる。此の *Schema* は、同じ弁証論附録中に云はれらるる "ein Analogon von einem Schema der Sinnlichkeit" (B. 693) とほぼ同じ性格をもつものと考へてよからう。又右の一文は、「もとも」と悟性に対し、その使用の汎通的統一



一七 先天的に確立する原則は何かも同様にいはあるが経験の対象に對してもあつてはまゝかゝる。純粹理性の諸原則は経験の對象に關しても客觀的實在性をもつてあつてゐる。(B. 693) 又、ふらさ内容をもつてあつてゐる。

⑩ 179. i) B. 303 ii) Prolegomena; § 33, 34

i) die reinen Verstandesbegriffe niemals von transzendentem, sondern jederzeit nur von empirischen Gebrauches sein können.

(日本標準規格 B列 4)

ii)

§. 33

Es ist in der That mit waeren reinen Verstandesbegriffen etwas verfügbares, in Ansehung der Anlehnung zu einem transzendenten Gebrauch, u. d. w.

§. 34

Es waren also zwei wichtige, ja ganz unentbehrliche, obgleich äußerst trockene Untersuchungen nötig, welche Krit. Seite 137 ff. und 235 ff. angefaßt werden durch deren erstere gesprochen wurde, daß die Sinne nicht die reinen Verstandesbegriffe in concreto; sondern nur das Schema zum Gebrauche

derselben an die Hand geben, und der ihm gemäße Gegenstand
nur in der Erfahrung (als dem Produkte des Verstandes aus
Materialien der Sinnlichkeit) angetroffen werde, u. s. w.

③ vgl. Akademia-Ausgabe, S. 3 f. (Bd. 7)

Der Begriff der Freiheit, sofern dessen Realität durch ein
apodiktisches Gesetz der praktischen Vernunft. bewiesen ist,
macht man den Schlussstein von dem ganzen Gebäude eines
Systems der reinen, selbst der spekulativen Vernunft aus,
und alle anderen Begriffe (die von Gott und Unsterblichkeit),

(日本国文館編 B 外 4)

welche als floße Ideen in diesen ohne Haltung bleiben, schlie-
ßen sich nun an ihn an und bekommen mit ihm und durch
ihn Bestand und objektive Realität, d. i. die Möglichkeit der-
selben wird durchweisen, das Freiheit wirklich ist; dem
diese Idee offenbart sich durchs moralische Gesetz.

⑫ 近世の理念として先に吾々は魂の理念を考へたが、
カントに於て魂の理念と自由の理念とは同一

より區別を以てする。即ち前者は心理学的後者は宇宙

論的と考へられぬものがある。

Kyoto University

三 四の宇宙論的
 理念の中、何故
 才三の定立のみ
 が採ら
 れたかといふ
 ことを明
 かにはしな
 ないが、恐
 らく、才一
 才二が宇宙
 の理念、
 才四が神の
 理念をさし
 てみたの
 に対し、才
 三が人間の
 主体の自由
 の理念をさ
 して見た
 から、はな
 いかと私は
 考へるであ
 る。

Kyoto University



Kyoto University

